

令和四年十一月吉日初版作成

愛と感謝の心は

すべてを光でつなぐ

高嶋善三郎

## 目次

- 赦す対象の自分は業生なのか・・・・・・・・・・・・・ 3
- 神に通じている想いと、神と通じない想念行為・・・・・・・・ 4
- 誤てる想念（業想念）が生まれだわけ・・・・・・・・・・・・・ 7
- 真実の自己と現われの自己を区別する・・・・・・・・・・・・・ 9
- 愛と感謝の心はすべてを光でつなぐ・・・・・・・・・・・・・ 10

### お願い

既に作成した資料（バックナンバー）は、ウェブ・サイト『白光北陸』のブログ欄に掲載しています。

より分かりやすくするため、「感想があれば、お聞かせください。次の連絡先にお問い合わせ致します。

（携帯）090-3346-0919

（メールアドレス）[zensan@peach.ocn.ne.jp](mailto:zensan@peach.ocn.ne.jp)

## 赦す対象の自分は業生なのか

『人間と真実の生き方』の中に記述されている自分というものは、業生ですかという質問がありました。この質問の裏には、自分を赦すことが出来ない、つい自分を責めてしまう。この自分とは、業生ではないかと考えてしまうということでしょう。これに対する答えを整理します。

結論から言いますと、五井先生は「神の分霊であって、業生ではない。

その理由として、この自分は物質界の業生の波を超えている自分、つまり本心の一つの現われというところが、さきほから「と言われています。

この理由について、より具体的に解説されています。

この地球界に肉体人間として生活している人、誰でもこの地球世界の物質波動にあわせていきてゆかねばならない。それ故霊界の分からない自分であっても、物質世界でのやりとりの過去世からの業の流れが、いつも自分を取り巻いている。その業は、(自分の肉体身の想いの働きがつくっているのに)あたかも神霊の自分自身がつくったように肉体身の

想いのほつからみえるのである。しかし、実際は、神霊の自分のほつは、生命エネルギーを出しているだけで、物質界の業生のほうが、そのエネルギーを力として、業生同志の和合をはかっているのである。

神霊のほつの調和というのは、全く汚れもけがれもない調和であるが、物質界のほつの和合は、お互いの利害打算の妥協によって調和のようにみえているだけなのである。そういう妥協の姿は、神霊のほつに心をおいてみると、不潔な汚れたものであって、責め裁かすにはいられないような、真理にもとるものをもっている。だから、どうしてもそういう他人の姿を責め、自分の心をも責め裁くことになってしまっている。

そのところが非常に問題で、今日までの宗教のあり方では、責め裁きつつ、真理に近づいていくようにしている。他人を責め裁くことを止めても、自分の心が終始責め裁きつつけてゆく。そういう心の姿勢は、他人を責めまいとしながらも、いつの間にか責めつつけている。だからどうしても、業の波がぐるぐる廻りをして、その人から離れてゆかない。(このような現象になるのは、肉体の心の働きであるが、そのもとでは、すべて本心からくるエネルギーであり、このエネルギーはその人の選択と注目に従って意のままに動くことを忘れているからである。)

そこで、五井先生は、その現象を手放す方法として、次のように示されています。

私（五井先生）は、それ（責め裁く想念）を本心から離してしまつために、消えてゆく姿という言葉を使って、そういう責め裁く想いを自分を取り巻く業の波のほうに向けたら、他人の業のほうに向けたらせすに、一挙に神霊世界に光明波動の中で消してもらつたための世界平和のお祈りをしてゆくのであると言っている。

即ち、自分を赦し、人を赦し、といつても悪業の想念行為を赦すのではない。悪業の想念行為にからまれて、本心を見失つた自分（現意識）に本心本体のほうの自分をあらためて、世界平和の祈りによつて、思いおこさせるのであり、悪業の想念行為は、再びあつてはならぬものとして、消して去つてしまうのである。（略）

物質界は、微妙な神霊波動の世界からみると、光のまだゆきとどかない部分が非常に多く、闇の中を進んでゆくようなものである。しかし、光明波動である神の子人間がすすんでゆけば、それだけ闇はとけて、光明の世界がひらけてゆくのである。

だから、人間は、うますたゆまず、神の子であることを信じて、いくらか業生の波がふりかかってきても、それはすべて、闇の消えてゆく姿

して、突き進んでゆけばよいのであると説明されています。（白光誌1977年12月（6ページ）「自分というもの」）

### 神に通じている想いと、神に通じない想念行為

ここで、本心の自分を取り戻すためには、本心を取り巻いている想念について、明確に理解することも必要です。

各分霊がこの肉体界に愛と調和と美の世界を現わすために、霊界に降りて来て、霊界に所属しながらその心（念）をもって各幽体を創造し、その念がだんだん物質化して幽界、肉体界が出来たのである。

この幽体はそれぞれの念が記録される場所となる。即ち業因縁の蓄積場所である。ここに蓄積された記録や記憶が肉体の頭脳にキャッチされ、考えとなり行動となってゆく。この蓄積された記憶を潜在意識といい、頭脳にキャッチされたものを顕在意識という。（『神と人間』29ページ）「想念はこの時に出来たと言つていいでしょう。想念は、この肉体界の闇の世界を光に変えてゆくプロセスとして必要不可欠のものであったと考えられます。」

想念の働きの仕組みと実態を整理してみましよう。

●想念はすべて業である。天地に充滿する一つのもは、活動しようにも活動できない。その一つのもが二つに分かれ、四つに分かれて初めて活動ができるわけである。一つのもが二つに割れば、当然そこに隙間が出来る。その隙間が業となったのである。言い換えれば、肉体に生まれてきて想ったり行ったりしていることをいう。

●想念の中には、神様に通じている想いや神と通じない想念行為があり、その前者を本来因果といい、後者を悪業（業想念）という。

●人間の想念意識というものは、表面で思ったことが、そのまま潜在意識となってゆくものであり、逆にまた潜在意識の中から、表面の意識や行動に自然に現われてきたりするのである。表面で過去世から今日まで想ったり行動してきた、いわゆるその人の過去の想念行為が、現在の意識とは全く相反する行為となっていて多くのことである。そこに人間の不幸が起こってくるのであるから、その潜在意識を、表面の意識と全く一つの想念に統一しておかないと、自己が現在望んでいる幸福な環境が現われてこないのである。

顕在意識というものは、肉体構造の中にあるものであるが、潜在意識というものは、肉体構造の中から、幽体、霊体という奥の体、つまり四

次元五次元という次第に次元の高い階層に蓄積されている。そしてそのずっと奥に神意識というものがあるのである。そして、普通いわれている潜在意識というのは、肉体と幽体にわたって潜んでいる意識なわけである。『愛すること』189ページ」

●人間が行為としてなしたことはどんな些細な事も、全て自己の幽体に記録すると同時に、この現象世界の幽界にも記録することになっている。

●やったことは輪廻転生してぐるぐる回っているから、行ったものは自分にまた返ってくる。一度いいことをする。そうするとそれがスーッと良いものは波長が合って、十にも二十にもなって返ってくる。悪いことをした場合にそのまましておけば、十倍二十倍にもなって返ってくる。

●人間の因縁因果の波というのは、ぐるぐる輪のように回転しているのであって、顕在意識から潜在意識に、現れている世界に、又その反対に潜在意識から顕在意識へと、回りつづけているのであり、私共は常にデータベースを持っていて、瞬々刻々自己の想念行為を吹き込み、そして同時に聞いているという形になっている。

●人間の想念は、神の直霊から分霊として働いている本心の周囲を何重にも巡っている波動（びびき）で、世界人類の個人個人を結び合い、交流し合いお互いに影響を及ぼしあっているものがある。

そしてそれと同時に、すべての人間の想念波動は、自分の上に流れて来ている。例えばテレビやラジオの音波や光波は、絶え間なく大気を流れているが、スイッチを入れダイヤルをそれぞれ合わせなければ、何の音も聞こえず、何の映像も映っていない。しかし、ダイヤルをひねれば、音も聞ければ、映像も映ってくる。それと同じように人間の想念波動も自己の意識、意識といっても表面にでている顕在意識だけでなく、潜在している潜在意識を含めた想念波動の部分の、ダイヤルをひねっていることになる。つまり人類すべての想念波動が、自分の上におおいかぶさって来ている。自分の回しているダイヤルの分だけが、自分の運命となって現われてくる。この真理から考えると、個人の想念行為は、自己にその報いが必ずやってくると同時に、人類全般にもその影響を及ぼしている。どんな小さな想念行為でも、ゆるがせに出来ないのである。

また、人間の想念は波の動きのようになって、この地球を常に経巡っている。人間の想いは、例えどんな細かいことでも、この地球や宇宙を巡っている。そしてその想いと同じような想いを十倍二十倍もお供につれて、再び自分の所へ返ってくる。』『白光誌』1964年7月号ページ)

●想念波動とは、電波や光波や音波よりももっと微妙な、精神宇宙子

の波動であり、その渦はそれぞれがエネルギーであり、そのエネルギーは人間の肉体に働きかけて、人間にその想念波動の通りの行為をなさせしめるのである。

その想念波動が争いや妬みの暗い汚れたものであれば、働きかけられた人間はそういう行為をするのであり、愛や善意の光明波動であれば、愛の行為になってくるのである。

光線よりももっと微妙である想念の波動は、直接に脳髓に入りこんで来るのであり、神経系統のあらゆる所にも沁みこんでくるのである。

（『白光誌』1964年7月号5ページ）

●神から分けられた生命エネルギーを基として、人間各自は自己の想念波動を出して、自己の形の世界の運命をつくってゆくのであるが、人間がこの地球という物質世界に、肉体という衣を纏って生活するようになってからは、どうしても肉体的自己保存ということに重点が置かれ、競争心や争いや恐怖や恨みや怒り嫉妬などが生じてきて、今日の世界をつくりあげてきたわけである。想念の波は行為となり、行為は潜在意識層に入って、再び顕在意識となり、また行為として繰り返されてゆき、その間、人を憎む想い、争いの想い、妬みの想い怒りの想い等の、他を痛め、自己を傷つける想いが、自己の想念の輪の中にも、地球世界全体

の波動圏の中にも充滿してゆくのである。

これが大きくは世界戦争や、天変地変となり、小さくは、自己の運命の崩壊ともなつて現われてゆくのである。『神は沈黙していない』59ページ)と解説されています。

この想念の仕組みと実態を知ると、「怒らうとせぬのに怒ってしまい、不幸にならうとせぬのに、不幸になつてしまふ等々は、すべて潜在意識(幽体、幽界)からの意識の流れによる。』『神と人間』23ページ)ことが理解できます。

### 誤るる想念(業想念)が生まれたわけ

誤るる想念(業想念)について前項で、神に通じない想念行為と言及したところですが、それはどうして生まれたかみてみましょう。

光一元の世界には闇がないと同様に、闇一元の世界で光の存在がない場合には、闇はそれ自身闇であることを自覚することはないが、ひとたび光がそこに放射され始めると、光と闇との区別がはつきりついてくる。そして光が前へ進むにつれて、闇は自身の姿をそれだけずつ、削り取られてゆく形になるのである。

神がその光線を地球界に働きかける場合には、どうしても地球界と同じような物質体の肉体人間を必要とする。

ところがこの肉体身というのは、地上界に属する物質なので、地上的な性質をそれ自体が持っているので、神の光が地球界の闇を進んでゆくとつれて、未開発が開発されてゆく過程において、種々様々な動揺や変化が起こってくる。言い換えれば、人間がこの地球という物質世界に、肉体という衣を纏つて生活するようになってからは、どうしても肉体的自己保存ということに重点が置かれ、競争心や争いや恐怖や恨みや怒り嫉妬などが生じてきたわけである。

即ち本来の人間が神の光の側にあるにもかかわらず、反対的に考え、かえつて自身を闇の側に置いてしまい、闇の崩れゆく姿を自身の崩れゆく姿と同一視してしまつたのである。

この不安恐怖つまり神の光、靈性を離れた考え方が無明であるわけで、それが業想念の生まれた原因なのである。これがキリスト教的に言えば、アダムとイヴの原罪といわれているところなのである。

このように人類自身が神の光そのものであることを忘れ、闇の産物である肉体人間であると誤り考えってしまったことが、罪といわれるものの最大の原因なのである。

五井先生は、また別の言い方で次のように言及されています。

大霊（神）はすべての力の根源であって、すべてを一つに結ぶ調和そのものであるのに、その大調和の姿がそこに現われようとして、業想念の壊滅をひき起こしているのに、そうした神の理念の現われの方に想いをむけずに業（カルマ）の方に想いをむけるから、不平不満や、恐怖や恨みが起こる。不平不満の想念の人には不平不満の事柄がかえってき、恨みを持つ人には、恨みの想いがかえってくる、自分が出したものはすべて自分にかえってくる、というのが、業（カルマ）の法則なのである。この業（カルマ）というのは、神がなくて現れたものではなく、間接的にはやはり、神の力によって動かされているのであるから、神がその必要を認めない時には、崩れ去るのである。

神を離れた誤てる想念というのは、本当は神様のひびきを現わすための肉体なのに、その神霊のひびきを忘れてしまって、肉体だけを別に離して考えるから、生命はそこにだんだん枯渇してゆく。生命エネルギーがなくなってくる。やがては滅びるという事になる。それは天変地変で滅びるか、戦争で滅びるか、七ちからにしても生命エネルギーがなくなってくるから、枯れてしまうことに注意されているのです。

一方、業の波動は、神のみ心のひびきでも、実在の波動でもなく、人類が神のみ心を離れて独り立ちしようとした時から巻き起こされた波動なので、人類が再び神のみ心に入り込んでしまえば、そのまま、いつの間にか消え去ってしまうものなのである。業の波動は、実在の波動と対立するものではないと解説されています。『神は沈黙していない』(52ページ)

### 真実の自己と現われの自己を区別する

それでは、どのように業想念を光に還元していけばよいのでしょうか。その方法が『人間と真実の生き方』に示されていますが、それを補完して次のように五井先生や昌美先生は解説されています。

結論から言いますと、最終的には肉体の人間になっていったときに失った肉体外の六感（直感）直覚（神智）即ち直観力を取り戻す、養つことといわれています。

まず五井先生は、生命の本源の世界につながっている自分と肉体頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分の区別が出来る心境といわれ



てます。

五井先生著の『老子講義』14講では、「人を知るは智なり、自ら知る者は明なり。人に勝つ者は力あり。自ら勝つ者は強し。足ることを知る者は富めり。強いて行う者は志有り。」(道徳経第33章)

人を知るのは智でもできるが、想いを静め、心を深めて、じっと、生命の本源の世界にまで入ってゆかないと、真実の自己と、現われの自己との区別をはっきりつけて、真実の自己、大生命の分生命である自分と、いうものを知ることができない。そういう境地になることを明(めい)というのだ。あらゆる業想念波動を超える程の強い意志力は、やはり明といわれる程の心境にならぬと現われぬことなのである。想念を常に物質世界の中に置かずに、神のみ心の中に入れてきている人は、如何なる環境にいても、足ることを知る人であり、心富める者である。何事にも全力を挙げてぶつかってゆける人こそ志有る者として、神は天命を成就させるのである。

自分とは何かに焦点をあわせて整理すると、次のようになります。

自分について、生命の本質の世界に繋がっている自分と、肉体頭脳知識や頭脳に残っている体験で知る自分、言い換えれば、真実の自己と現われの自己がある。この二つの自己の区別を知るとは、心を深めて、

じっと、生命の本源の世界まで這ってゆかないとできない。真実の自己と現われの自己を知りはじめると、すべての想念行為は正しくなり、他人の言に左右されたり、地位や物質や情愛で動かされたりすることがなくなり、神のみ心のまま、本心そのまま行為ができるようになると言われています。(即ち、顕在意識で思ったことが、そのまま現実に現われないのは、潜在意識に存在している、過去に発した神に通じない想念行為によって、本心が動けない状況にあるからであり、本心の存在を認め、それに自分の意識を合わせれば、顕在意識で思った通りの現実が現われるのです。)

### 愛と感謝の心はすべてを光でつなぐ

一方宮美先生著の『次元上昇』の100ページに解説されています。それを要約しますと、次のようになります。

直観力は、ひらめきであり、心に直接的にひびいてくるもので、特に必要な直観力は、否定的観念、暗黒的想念の波動を見極める直観力だと言われています。これが養われてくると、神の叡智をキャッチできるようになりますと言われています。

そのためには、まず、自らが放つ想念と波長が合う、周りの想念を引き寄せへるので、祈り、自らの想念を浄める。そして口頃の自らの想念のあり方として、すべての物事について原因結果だけでなく、一瞬一瞬のプロセスにも愛を注ぎ、感謝を注ぎ、否定的想念や言葉は、死語にしていくことを勧められています。

否定的想念、暗黒的想念の波動を見極める直観力が、大いに養われてくると、自らの本心（神聖）が放つ波動が神の波動、光の波動であり、強力なるパワー、エネルギーを持ち、宇宙神の光の一筋そのものであるため、いかなるマイナス波動からも決して影響は受けなくなり、すべては完璧にうまくいく。幸せて、平和で、調和に満ちた人生が結果としてもたらせてくれると解説されています。

五井先生、昌美先生とも、直観力を取り戻すには、「誤てる想念（業想念）が生まれたわけ」の項目で言及しましたように、自分自身を闇の側に置くのではなく、常に神の光の側に置き戻すことを示され、その方法として祈りや口頃の自らの想念のあり方を解説されています。

ここで、すべての物事について原因結果だけでなく、一瞬一瞬のプロセスにも愛を注ぎ、感謝を注ぎ、否定的想念や言葉は、死語にしていく

とについて想念の仕組みから少し整理してみましよう。

愛と感謝の心は、神様に通じている想いであり、これを忘れ、肉体がすべてと考えたため、神に通じない業想念が発生し、自分の本心を取り巻く業想念が形成されたのです。この愛と感謝の心を取り戻せば、無限なる智慧と能力を持った本心が現われるのです。愛と感謝を注ぐとは、守護の神霊への感謝の心を常に思い、どのような苦しい立場にあらうと、「大難を小難にいただいた」や「いい体験をさせていただきました」と感謝し、闇を超えようとしている自分を認め、愛することです。

自分の周りの、花々や木々などは神に通じているため、愛と感謝を注げば、そのまま愛と喜びをもってこたえてくれます。

自分の言葉、想念、行為を通して愛と感謝を現わしていけば、自分の周りは、すべて喜びに満ち、美しい光によって輝き出します。

「私を見た者は、即ち神を見たのである。私は光り輝き、人類に、いと高き神の無限なる愛を放ち続けている」自分に気付くことでしょうか。

愛と感謝の心は、すべてを光でつなぐ、魔法の杖といってもよいでしょう。